

幻想郷に侵入した魔獣達を圧倒的な霊力で蹴散らしていた霊夢だったが、ただ一発の被弾が命取りとなった。

時を巻き戻し、霊力など無いただの小娘だったころにまで体を変化させる  
『時逆の妖毒』がその呪力弾には付与されていたのだ。  
戦術の一切を失った哀れな巫女。  
その無毛の性器へ、化け物たちがにじり寄る。





文字通り一番乗り。

愛らしく細い肢体に初めに乗りかかったのは  
ただ長い間生き延び、下級の変化と化しただけの  
豚妖だった。

何の経験もない乙女の肉体に激しく欲情し、  
ドリルのような螺旋を描くペニスを、霊夢の可愛らしい  
尻肉の谷間にこすりつけ続ける。

豚舎そのもののような吐き気を催す匂いを撒き散らしながら、  
必死に足掻く巫女の背中にひづめを叩きつける。





涙ながらの哀願など無視して、長大な豚のペニスが  
巫女の性器へ根元まで入った。

「はぐあぁっー！」  
絶叫する霊夢。

異様な形のペニスが膣をすべて占領する。  
畜生に犯されたという喪失感で、  
彼女の目の前は真っ暗になった。

豚のペニスはドリル状になっている。  
硬い先端で子宮内部にまで侵入し、  
確実にメスをはらませる構造なのだ。

巨大な豚妖が全体重をかけてペニスをさらに奥に進める。  
閉ざされた子宮口は、通すまいと必死に抵抗するも、  
その圧倒的圧力の前に、あっけなくこじ開けられた。  
肉槍の切っ先が聖域たる子宮内にぶち込まれた苦痛と屈辱に、  
もはや声すら出すことができない。







射精が始まった。

子宮口を完全にふさぎきった逃げ場のない状況で、

豚妖は巨体を震わせつつ、ありったけの精液を

少女の膣に注ぎ込み始めた。

豚の体温が人間より高いため、霊夢は粘膜が焼けるような熱さを  
感じている。

子宮が無理やり、大量の豚の精液で膨らまされていく。

地獄の苦しみとって過言ではないだろう。

豚の精液は非常に多量だ。

この豚妖の巨体ならおそらく4リットル以上はある。実に人間の1000倍以上の量だ。  
それがすべて注がれるまで交尾の苦痛が終わらないことを、まだ霊夢は知らない。



射精が始まった。

子宮口を完全にふさぎきった逃げ場のない状況で、

豚妖は巨体を震わせつつ、ありったけの精液を

少女の膣に注ぎ込み始めた。

豚の体温が人間より高いため、霊夢は粘膜が焼けるような熱さを  
感じている。


子宮が無理やり、大量の豚の精液で膨らまされていく。

地獄の苦しみとって過言ではないだろう。

豚の精液は非常に多量だ。

この豚妖の巨体ならおそらく4リットル以上はある。実に人間の1000倍以上の量だ。  
それがすべて注がれるまで交尾の苦痛が終わらないことを、まだ霊夢は知らない。





少女の滑らかだった腹部が、妊娠したように大きく膨らんでいる。  
地面に頭を打ち付けるように身をよじりながら、30分は続いた射精に、  
必死で耐えた結果がこれだった。

『……ん……ん……』

少女の悲痛な叫びなど知らぬげに、  
豚妖は膣と子宮の感触をその  
異形のドリル型のペニスで  
存分に味わいながら、

ゆっくりと全ての精液を出し切った。

本来ならゼリー状の液体で最後に子宮口の蓋をして、

絶対に精液が漏れないようにしたうえで交尾を終了するのだが、  
今回はそれはあえて行わない。

また自分の番が何度も回ってくるからだ。一回だけで終わるにはこのメスは  
少々惜しい。



少女の滑らかだった腹部が、妊娠したように大きく膨らんでいる。  
地面に頭を打ち付けるように身をよじりながら、30分は続いた射精に、  
必死で耐えた結果がこれだった。

『……ん……ん……』

少女の悲痛な叫びなど知らぬげに、  
豚妖は膣と子宮の感触をその  
異形のドリル型のペニスで  
存分に味わいながら、

ゆっくりと全ての精液を出し切った。

本来ならゼリー状の液体で最後に子宮口の蓋をして、

絶対に精液が漏れないようにしたうえで交尾を終了するのだが、  
今回はそれはあえて行わない。

また自分の番が何度も回ってくるからだ。一回だけで終わるにはこのメスは  
少々惜しい。





豚妖のドリル形のペニスが膣肉をえぐりながら引き抜かれると、  
噴水のように精液があふれ出た。

汚らしい豚妖と、愛らしい少女の交尾を長々と見せられ続け、  
耐えられなくなった回りの妖怪たちが、霊夢に汚液をいっせいに  
ぶちまける。

粘液まみれになった少女の裸体に、次の化け物達がすぐにのしかかり、  
か細い悲鳴は歓声にかき消された。

華奢な全身を露にされて、  
霊夢は触手に完全に固定された。

無毛の清らかな秘裂は、まだ形は乙女そのままに見えるが、  
すでに何体もの変化たちに犯されている。  
はつきりと獣の姿を残し、しかしどんなものよりも強い  
性欲をぎらつかせるそいつらとの交合は、  
余りにも過酷だった。  
自分が人間でなく、動物のメスとして犯されたという事実は、  
心に決して癒えない傷を残すのだ。







次の相手は恐ろしいものだった。

見上げるような巨馬だ。

霊夢の腕より太く長い、1メートルを優に越す

杭のような性器をしながらせ、

愛らしい割れ目に突きこもうとしている。

こんなものを入れられたら、死ぬかも知れない。

息もつけぬほどの恐怖に襲われ、あらん限りの力で

身をよじるが、触手の拘束は緩まない。

熱い肉杭が霊夢の秘所に口づけした瞬間、

巫女は下唇をかみ締め息を呑んで、挿入の感覚に備えた。



『ふ……ぐうああああ……』

奥の奥まで、はじめに豚に広げられた子宮の中にも、

馬の肉杭がみずみずしい肉ひだを押し広げながら、

侵入した。

余りにも巨大なペニスに貫かれる痛み、馬との交尾という屈辱、

内臓を圧迫され呼吸さえままならぬ苦しみ。

それに加えて、そいつが獣の本能むき出しで叩きつける

ピストンの激しさ。

限界はとうに越え、身も心も碎け散ってしまいそうだ。





馬妖が全身を震わせ、少女の膣奥に獣の精液をぶちまけた。  
『あ……ぐ……あ……』  
体の全てを汚されるような汚辱感。  
突き刺さった野太いそれは、  
飽きることなく延々と精液を噴出し続ける。  
霊夢は涙を流しながらただ、耐えることしかできない。

『い……いや……苦しい……』  
悲鳴を上げるのも無理は無い。  
子宮内に突き刺さった馬のペニスの射精はいつまでも  
勢いが衰えることなく、妊婦のように少女の腹を膨らませ、  
なおも快樂をむさぼりつつ射精している。

『うああっ……あ……』  
たまらず悶絶する靈夢。馬妖はその華奢な肉体に完全におぼれ、  
何度も何度も可憐な巫女を犯しつづけた。





『う……あ……』  
焦点の合わない瞳。すっかり光を失ってしまった。  
瞳の内外を問わない射精の嵐に、  
少女の全身は白く汚されきってしまった。  
すっかり畜生の巨根になじんだ秘裂から、  
湿った音とともにペニスが引き抜かれる。  
湯気を上げながら流れ出る大量の馬の精液と、  
何度も絶頂を迎えた証の少女の愛液が、混じり合いながら噴出した。





変化となった獣たちには、ある恐ろしい能力が備わることがある。

精液を注がれていないときでも、膨らんだままになってしまった霊夢の腹が、それが何であるかを示していた。

子を。孕ませることができなのだ。

どんな怪物が生まれるかはわからないがすでに巫女の体は母となる準備を整えつつある。

臨月間際となった今、まだ平らかな胸から、わずかな母乳が出始めていた。



「あたしに何かしたらら：八つ裂きじゃすまないからね：！」  
可憐な鬼の少女、伊吹萃香は、姿に見合わぬ迫力のある声ですこむ。  
だが、破られたスカートの間から、ぞくぞく割れ目すら隠せぬこの状況では、  
ただの強がりには過ぎないだろう。  
周りを囲む低級妖怪、主に変化と呼ばれる、動物が低級妖怪となったものたちは、  
大声で嗤った。

人間から入手した特別製の毒、アルコールの分解を阻害する薬品を  
食事に混ぜるだけで、簡単にことは運んだ。  
本来何百体でかかっても傷すらつけれない戦闘力を誇る鬼族である  
萃香だったが、  
生まれて初めての強烈な悪酔いにもはや妖力をふるうこともできず、  
完全に無力化されていた。





スカートが取り払われると、周りの化け物どもから歓声上がる。  
豚や馬などの変化が多いために、まるで厩舎のような騒ぎだ。  
萃香は涙をうつつすと浮かべ、力の入らない足をなんとか閉じようと  
身をくねらせる。



完全に無毛のそこは明らかに男を知らぬ様子だ。  
居並ぶ妖怪達は誰が一番に犯すかしばしもめていたが、  
やがて最も下等な馬妖の頭頭に決まった。  
人外のものたちの中で最も尊く、最も強い一族である鬼の娘が、  
最下級の畜生に犯される光景をみな望んでいたからだ。



強気だった萃香の表情が、目の前に突き出されたそいつのモノを見たときに強張った。  
余りにも大きい。鐘撞きに使う丸太のようなサイズだ。  
『な…何…これ…』

鼻息が荒い牡馬の変化は、勃起したペニスにおびえる少女の表情を十分楽しむと、余裕たっぷりの動きで、処女の鬼娘に乗りかかった。  
『ひ……………！』  
前足で大岩ごと萃香を抱え込むようにして、一気に挿入する。





ズブズブ……!

ぴっちり閉じた秘裂を限界以上に拡張しながら、肉の柱が挿入される。

『い、痛い……や、やめ……』

鼻息があらぬ馬妖は、膣の一番奥にまでペニスをめり込ませると、一切の容赦なく、「t以上あろうか」という巨体を揺らしながら、本気の交尾を開始した。

そう簡単に死ねない鬼の一族に生まれたことを呪いたくなるほどの屈辱と苦痛のなか、下腹部を襲う

内臓が口から出そうな衝撃の連続に萃香は身悶える。

『ふ、ぐあっ、や、嫌っ、あ、あ、ああっ……!』



ぶびゅぶふうっ!!

馬がいななき、腰をいっそう深く突き入れると、  
焼けるように熱い粘液が、膣の中で勢いよくはじけ散った。

『うあ……あ、熱い……?なに、これ……』

つい先刻まで乙女だった萃香には、一瞬何が起こったのか  
理解できなかつたが、結合部から勢いよく飛び散る汚液を見ると

自分が馬との交尾の果てに、種付けされたのだと理解した。  
絶望に顔をゆがめながら、こらえきれずにしゃくりあげる哀れな鬼の少女に、  
ますます気分を良くした馬妖は再び前後運動を開始した。





異形のものたちによる輪姦が何周か過ぎただろうか。  
臍内どころか全身くまなく粘液で汚され、荒い息をつく萃香。  
だが、汚されきったにもかかわらず、その鬼としての誇りを失わない美しい瞳に。  
なおも妖怪たちはいきりたち、少女鬼の細身の肉体をむさぼり続ける。



萃香は巨大な蟲妖に、その小柄な肢体を抱え上げられ、後ろの穴を犯されていた。低級妖怪達の興味は今後は後ろの性感開発に移りつつあった。

片手に馬妖怪の長大なペニスをしごき、もう片方の手は巨大な牛人のペニスを撫でさすっている。

萃香は徐々に自分の認識がゆがんでいくのを感じていた。

余りに長く陵辱が続きすぎたために、屈辱や怒りはとうに麻痺し、代わりにこれまでに一回も意識したこと無かった、肉欲めいた感覚が生まれ始めている。

蟲妖の輸精管が脈動するにつれ、声を抑えるのに必死になっていく自分に、鬼少女は戸惑い、おびえ始めていた。





びゅくん!!  
びゅくっ!!

卑猥な音をたてて、尻穴で精液がはじけ散る。

妖怪の種類によって温度や粘性、それに量も多種多様だったが、こいつの異様に冷たいサラサラとした精液は彼女の好みにぴったりだったようだ。華奢な体を震わせ、軽い絶頂を迎えてしまう。  
「あ……なに……っこの……感じ……」  
少女鬼の可憐な顔に、とまどいの色が浮かぶ。内臓の奥にまで、蟲の精液が流れ込む。





どびゅぶっ！  
びゅるるっ！

愛らしい少女鬼を汚したい一心で、周りの妖怪たちがいっせいに精を放つ。



顔といわず体といわず全てをどろどろに汚されながら、さらけに続くであろう激しい陵辱のことを思うと、胸が高鳴るのを萃香は感じていた。





聖銀粉末散布装置。最強クラスの魔物である吸血鬼を、  
いとも簡単に無力化、捕獲できる新式の対魔兵装の一種だ。  
レミリアほどの力があるものであっても例外ではない。

魔力を中和する聖銀の微粒子が空中に撒かれ、気がついたときには  
全ての力を失っている。残っているのは再生能力くらいなものだ。  
この装置を使って、低級妖怪の群れはいとも簡単にレミリアを捕獲した。

気高い怒りに赤い瞳を輝かせながら、必死に抵抗するレミリア。  
死なないからという理由ではじめの相手は最大クラスの豚の変化が選ばれた。  
低級妖怪達は魔王ともいえるほどの力を持つ吸血鬼が、自分たちよりさらに

下に引き摺り下ろされる一瞬を何よりも望んでいたのだ。  
直径15センチはあるとかというドリル型のペニスをいきり立たせ、何トンもありそうな

巨大豚が迫る。こんなもので犯されたら出産以上の苦痛が待っているだろう。  
立つこともできないほど弱りながらも、必死に体をひきずって逃げるが、  
とうとう、絶望の一瞬が訪れた。

ぶうぶうと鳴くその獣の巨大ペニスが、身長130cmほどしかないレミリアの清らかな  
小さいスリットに、音をたてて突き立てられた。





「ぐ、ぐふぁ……おの……れ……!」

怒りと屈辱に顔を真っ赤にしながら、苦痛に耐えるレミリアだったが、豚が射精のために一番奥までペニスをつっ込むと、無様な叫びをあげた。

「な、なにこれ、一番奥の……中……まで、はぁうっ!」

ドリル状の形状には理由がある。とがった先端部で子宮口をこじあげ、直接その奥に射精するためののだ。

目的地である子宮内に先端が完全に挿入された瞬間、豚が吼えた。どくん、という音が空気を震わせるのをその場の全員が感じた。

グロテスクな肉のドリルから噴出した精液が、少女の女たる部分を直接汚し始めたのだ。

先端部がちょうど子宮口に蓋をする形状になっているため、逆流することなどそうそうない。ただ、豚が射精をやめるまで、精液を一滴のこらすぶち込まれ続けるのだ。

巨大な獣ほど体温は高い。吸血鬼ゆえにやや冷たい体を持つレミリアにとって、まさに焼けるように熱い粘液が、子宮を異常な勢いで膨らませていく。

見る間に、臨月の妊婦のようなスタイルになってしまった。平らな胸、華奢な体と精液で膨らんだ腹のギャップが余りにも哀れだ。

「ぐ、あ……くる……しい……!」

涙をこらえながら、豚に強制交尾されている気高い吸血鬼の姫。

身を汚され、心を壊されていくその瞬間瞬間は、砕け散るステンドグラスのように美しい。



「ぐ……ぐあ……ふ、ふうっ……」  
陣痛に苦しむ妊婦のような声で、頭を振りながら苦痛に耐えるレミリア。  
豚は延々と少女の子宮に注ぎ込み続ける。

逆流がないために、苦痛に身をよじる彼女のしなやかな膣が、  
自分のペニスをこすり上げる快楽に酔いながら。  
ピストン運動などせずとも、ペニスをこする快感と長時間の射精の快楽を  
同時に楽しむことができる。豚はかつて無いほどに満足していた。

「あ……ああ……」  
床に飛沫が少しずつ散る。  
さすがにどれだけ子宮口に栓をしているとはいっても、余りにも体格差が  
ありすぎたのだ。収めきれない分が、徐々に中から漏れ出してきている。  
レミリアが大きくのけぞった瞬間に、余りにも高まった圧力のために  
自然に子宮口のロックがはずれ、水圧で飛ばされるようにして吸血姫は  
前にのめった。





ぶぼん！という音と共に、爆発的に精液が飛び散る。  
高く掲げられた小さい尻を痙攣させながら、レミリアは全身で  
飛沫を受け止める。  
肉のドリルで穿たれたとは思えない愛らしい割れ目からは、  
絶えることなく精液の滝が流れ続ける。

レミリアは泣いていた。

苦痛ゆえではない。屈辱のせいでもない。  
延々と続く精液の流し込みのなかで、ほんのわずかではあったが  
快楽を感じてしまった自分に気がついていたらからだ。

もっとも古い吸血鬼の一族である自分が、よりによって豚との交尾で  
女としての喜びを感じてしまうなど……！！

自分に対する怒りに、肩を震わせながら嗚咽を漏らす。  
足元が粘液の海となったためにひざがすべり、まだ膨れたままの腹を床に  
打ち付けたレミリアをみて、周りの低級妖怪たちが笑った。  
かわいらしい尻を豚が前足で押さえると、さらに勢い良く精液が  
小さい窟穴から噴き出した。



カブトムシのような蟲妖が、小柄なレミリアを抱え上げる。  
あれほど凄惨な陵辱を一切感じさせない、清楚そのものの  
スリットは、再生能力ゆえのものか。

レミリアは豚に犯された屈辱から立ち直ってはいない。  
そこに別の化け物のレイプが加えられたら、精神が持たないかもしれない。  
必死であがく細い足を蟲の口から出た触手が拘束する。







『ひあ……ああっ！』  
剛毛の生えた生殖管が愛らしい割れ目に差し込まれる。  
左右の茶色の突起がうぞうぞとうごめき続けるそれは、  
素手で触るのさえためらわれるおぞましい代物だ。

その感触を、敏感な腔内で味あわされる吸血鬼の姫。

『あ……は……あ……』  
驚くべきことに、上気した全身はバラのような色に染まり、切なげな声を  
必死にこらえている。  
おそらく……先刻の種付けで、精神のどこかが軽く壊れてしまったのだろう。



ぐびゅううっ……!

刺激臭すら漂う蟲の精液が吸血姫の膣の隅々までしみこむ。  
アルコールを塗布されたかのような強烈な刺激が、  
考えもしなかったような性感となつて、彼女を襲う。

「お……お……く……うう……!」  
芋虫に与えられた快楽をかみ締めているようにも見え、  
わずかな理性でそれを押しとどめようとしているようにも見える。





芋虫はその反応を知ってかしらずか、丸っこい指で彼女の体を愛撫しながら、  
なおも犯し続ける。機械のように彼女の性感を刺激しながら、  
全身が白く染まるころ、レミリアはとうとう、墮ちた。

「だめ、い、いく…！ いっっちゃう…！」  
腔内に最後の射精が叩き込まれると同時に、  
気高かった吸血鬼少女の自我は、弾けた。





チルノがいつものように蛙たちを凍らせて遊ぼうと湖に出かけたとき、突如ものすごい大きさの化け蛙がのしかかってきた。

『ちよっと…なにをするの！はなせつてば！』  
冷気が一切効かず、もがくチルノはたちまち服を剥かれる。

長い間虐待され続けてきた同種の恨みを晴らすべく、巨大な生殖器がつるつるの割れ目にぶち込まれた。







「う…あああ…」  
かわいらしい悲鳴を意にも介せず、巨大な性器で妖精の肉褰を猛烈な勢いで犯しぬき、一切の容赦なく、精液を膣内にふちまける。両生類の生ぬるいそれが体の奥に注ぎ込まれる感触に、叫び声を上げるチルノ。  
射精の快楽に体を震わせながら、美しい氷の精を辱めた征服感に、化け蛙は酔いしれている。  
今となっては一族の恨みなど些細なことに感じていた。ただこの娘にもっともっとかわいらしい悲鳴を上げてほしい。小さい体を飽きるまで犯しぬきたい。  
そんな暴力的な性欲が、その無表情な目の奥に燃えている。



どれくらい時間が経ったろうか。  
余りに激しい陵辱に、チルノの意識は消えかけている。

小さく狭い腔内は何十回も連続しての蛙とのまぐわいですっかり  
広がり、こぼこぼと白濁が逆流している。

全身にこびりついた蛙の体液が、たまらない生臭さを放っている。

『もう……や……め……あたいが……わる……ぐふう!』  
再びつきこまれた巨大なペニスの衝撃で一瞬意識が飛ぶ。

『お……おぐう……』

無様な悲鳴を上げる氷の妖精。その澄んだ瞳に最後に移ったものは、  
雨のように降り注ぐ化け蛙の精液だった。

